

今昔物語集震旦部の標題について

宮 田 尚

今昔物語集には、各話に、それぞれ標題が付されている。それもただ単に、主人公の名がかかげられているにすぎないといった種類のおざなりなものではなく、はなしをふまえ、その内容を要約することをたてまえとしているかにも見える、形式的にもかなり整備された標題が付されているのである。

こうした今昔物語集の標題は、その特色のゆえに、なんのふくむところもない、無目的なものだとは考えにくい。おそらく、なんらかの目的をもって、意図的に設定されたものではないかと思われる。

かりに、これが意図的に設定されたものであるとしたらばあい、その意図が集の編集方針と離反してはいようはずはなく、したがって、標題は、編集方針そのものの、具体的なあらわれだということになるであろう。

一方、なんの意図するところもない自然発生的なものであるとしても、はなしに密着し、その内容を要約したかたちの標題である以上、それはそれなりに、たとえ潜在的なものではあるにせよ、そこには、編者の意識が、とうぜんあらわされているとみてよからう。

今昔物語集震旦部の標題について

要約には解釈がともない、解釈は、彼の意識の表出にほかならないと考えられるからである。

要するに、顕在的なものであれ潜在的なものであれ、今昔物語集のようなかたちの標題には、編者のものの考え方が、かなり色濃く示されているといつてよいものと思われるのである。

その意味で、本稿では、さしあたり震旦部の標題に焦点をあわせ、若干の推察をめぐらすことにしたい。

1

今昔物語集の標題は、いまいうように、はなしに密着し、その内容を要約することをたてまえとしているかにも見えるのであるが、これをかたのうえからいうと、△どこ▽の、△だれ▽が、△どうして▽△どうなった▽というかたちを、少なくとも震旦部においては基本としており、△だれ▽が、△どうして▽、△どうなった▽、あるいは、△どこ▽の、△だれ▽が、△どうした▽といったようなこれらの変形が、それに準じている。

ところで、編者は、直接的には、いうまでもなく、はなしを提供する立場にたっているわけであり、こうした標題も、その線から、享受者のはなしの理会の方向づけをするというねらいをもつて、編み出されたものであろうと考えられるのであるが、じつは、彼も、それ以前に、受けとめる側のひとりであったはずである。したがって、この標題には、あたえる側の立場からの発想としての、はたらしきかけの論理と同時に、編者が、享受者のひとりとして、はなしをどのように受けとめたかという、いわゆる、説話理会のありかたも示されているとみることができよう。

今昔物語集が、△今ハ昔▽にはじまり、△トナム語り伝ヘタルトヤ▽で結ばれる形式を採用し、一貫してその形式を守っていることは、周知のとおりである。ここには、なによりも、編者の、徹底した形式尊重の姿勢が示されている。もとより、これは集の編集方針にもとづくものであろうから、形式尊重の姿勢は、そのまま今昔物語集の性格なのだ、おきかえていうことができるであろう。そして、かたくななこの形式尊重の姿勢は、一方において、今昔物語集の編者たちが、いわゆる説話を、△今ハ昔▽のはなしであり、語り継がれてきたもの、そしてそれが、説話本来のあるべき姿だと解していたことを物語っているといつてよいであろう。皮肉なことに、こうした説話観を、それも、確信をもつて、いれはいるほど、文字化し固定化するという自らの行為は、反説話的だとうつるわけで、その後めたさの贖罪感が、こうした形式を、なまじ徹底させたために、かえって形骸化してしまっただにもかかわらず、あえて守りおこさせたのではなかったか。語り出しと、結びとの統一された形式

は、編者にとつて、一種の免罪符の意味をもつていたように思われる。しかもそれは、現におかしつつあるあやまちが、あやまちであることをさめた目でたしかめたくえでの、きわめて現実的な罪ほろぼしのように思われるのである。

さて、本文の体裁の決定に、編者の説話観がおおきく作用しているとみられる以上、標題が、その埒外にありえようはずはあるまい。じじつ、標題には、本文に示されている右のような説話観、すなわち、昔語りであることと、その伝承形態が語りであることに加えて、はなしの性格についての、いまひとつの考え方が示されているように思われる。

標題が、△どこ▽の△だれ▽が、△どうして▽△どうなった▽とどうかたちを基本としていることについては、いまふれたとおりであるが、私見によれば、この型をふくめて、震旦部の標題は、十八種の類型に分類できる。このうち、もつともおおいのは、基本型ともいふべき右の型で、八一例をかぞえる。震旦部四巻の現存するはなしが一七四話であるから、これは、全体の四六・五パーセントに相当する。ついでおおいのが、△だれ▽が△どうして▽、△どうなった▽という型であり、二九例（一六パーセント）。三番目は、△どこ▽の△だれ▽が△どうした▽という型で、二三例（一三・二パーセント）。四番目は、△だれ▽が△どうした▽という型で、一五例（八・六パーセント）。以上の四類型に、全体の八五パーセントに相当する一四八例がふくまれているのである。したがって、その他の十四類型は、それぞれ、ごく少数の例を有するにすぎないといふことになる。

よりも事柄に重きがおかれるものなのだと解していたもののように思われる。

2

今昔物語集の標題の形式は、先行説話集のそれと比較すると、画期的な、あたらしい試みであったといえるようである。

たとえば、本朝仏法部の出典のひとつと目されている日本往生極楽記は、ただ単に、はなしの主人公である往生者の名をかかげるにとどまっていたるし、本朝法華験記も同様で、いずれも、索引的標題の域を出していない。

日本往生極楽記や本朝法華験記とくらべると、日本靈異記のそれは、はるかに今昔物語集に近いといえるであろう。しかし、それとて、とうてい今昔物語集と同列にあつかわれるべき性質のものではない。靈異記の標題は、△だれに興味を示しておらず、事件と、それに対する仏教的立場からの評価、ないし意味づけに、もっぱら関心がむけられている。今昔物語集の標題が、はなしの要約であるとするならば、靈異記のそれは、はなしはだしく解説的であるといつてよい。そこには、要約に際して介入する解釈とはおよびもつかない、編者の思想そのものが、きわめてあからさまに示されている。これは、靈異記が、はなしを、はなしそのもののもつおもしろさを認めてとりあげた作品ではなく、自らの思想の伝達を効果的にするために、利用したにすぎないことによるものである。ために、した靈異記と、最大限に説話的であろうとした今昔物語集との立場の違

いが、それぞれの間に認められる本文の差以上に、標題にあらわされているといつてよさそうである。

今昔物語集とほぼ同時に成立したとみられる打聞集や、後代の成立ではあるが、今昔物語集以前に成立した作品の影響を強く受けているとみられる古本説話集や宇治拾遺物語には、いくつか今昔物語集に近いかたちの標題があるが、しよせん散発的であつて、亜流ではない。要するに、今昔物語集と同じかたちの標題は、少なくとも、現存するわが国の説話集には、求めることができないのである。

3

それでは、この標題は、まったく今昔物語集の独創にかかるものなのかというと、そうではなさそうである。この標題には、どうやら、手本があつたらしい。手本は、三宝感応要略録のようである。

三宝感応要略録の標題には、△だれに相当する部分が、仏・菩薩や動物であるものなどもあつて、この点は今昔物語集と違つているが、大部分のはなしの標題は、今昔物語集の**ばあい**と同じように、△だれが△どうした△というかたちをとっている。二、三の例をあげると、つぎのとおりである。

健陀羅国二貧人各一金錢共畫一像感応(上8)

造葉師形像得五十年寿感応(上22)

光宅寺雲法師講勝覺經降雨感応(中22)

これらは、いずれも、今昔物語集に類話の求められないはなしに付されている標題である。そこで、つぎに、今昔物語集に類話の求められるはなしに付されている標題と、今昔物語集の当該話のそれとを二、三対比させると、

(震旦悟真寺惠鏡、造弥陀像生極樂語(六15))

(悟真寺沙門釈惠鏡造釈迦弥陀像見淨土相感応(上7))

(震旦夏候均、造葉師像得活語(六24))

(夏候均造葉師形象免罪感応(上26))

(震旦張謝敷、依葉師經力除病語(六46))

(唐張謝敷誦葉師經除病感応(中32))

といったぐあいになる。三宝感応要略録にない△どこ▽についての記述が、今昔物語集ではいずれも△震旦▽としてあるとか、一方で△見淨土▽となっているものが、他方では△生極樂▽となっているとかいった違いはみられるけれど、少なくともこれらの例において、両者の標題が、きわめて類似度の高いものであることはたしかめられるであろう。

もっとも、これらは、両者のあいだにみとめられる五十八話の類話のなかでも、とりわけ類似度の高い部類に属する例なのであって、すべての標題が、この例のようだというわけにはいかない。むしろ、後でふれるように、部分的には、あきらかに相違の指摘できるものもある。けれども、程度の差こそあれ、大筋は、ほぼこれに準じたかたちだといってよいように思われる。

今昔物語集の標題と三宝感応要略録の標題とが、基本的な型を同じうしているばかりか、表現も近似しており、しかもそれが、一、

今昔物語集震旦部の標題について

二の例にのみみられる特殊な現象ではなく、かなり広範囲にわたってみとめられる現象であるとするならば、その間に、なんらかの連関があるとみるのが自然であろう。まして、三宝感応要略録は、周知のように、冥報記とならぶ、震旦部の有力な典拠とみられる作品なのである。今昔物語集の編者たちが、本文だけを見て、三宝感応要略録の、標題を見なかつたはずはなからう。

なお、冥報記には、標題は付されていない。その他の、震旦部の典拠とみられる資料も、標題が付されていないのが一般である。もちろん、標題の付されているものがないわけではないが、たとえば弘誓法華伝卷一のなかの教話にみられる、△だれ▽が△どうした▽というかたちの標題などは、むしろ例外的なのであって、三宝感応要略録のばあいのように、集規模で用意されており、その意味で、今昔物語集がもって範とした可能性のみとめられるものは、ほかにはないのである。

4

今昔物語集の標題は、以上のようなしだいで、三宝感応要略録のそれに示唆されて形成されたものであらうと考えられる。しかし、本文が三宝感応要略録にもとづくものであるばあいにおいても、編者たちは、三宝感応要略録の標題をそのまま転用するなどといったような、不精で、安易な方法はとっていない。かならず、なんらかのかたちで、手を入れている。このことは、両者の標題のうちで、もっとも類似の度合いの強いものとして右にあげた三例において

も、部分的に若干の違いがみられたことであらうなづかれよう。

さて、そこでもんだいになるのは、どのように変えており、そしてそれが、今昔物語集にとってどのような意味をもっているのか、という点である。

改変の種々相を、いちいちとりあげるのは煩雑であるから省略にしたがうが、おぼざっぱにいつて、今昔物語集の改変のありかたには、主として、つぎの三つのばあいがあったといえるようである。第一は、三宝感応要略録に欠けている、△だれ▽や△どこ▽を今昔物語集がおぼざっぱにいつたばあいである。

- (1) 金剛智三蔵、金剛界曼陀羅渡震旦語(六八)
金剛界曼陀羅伝弘感応(上三三)

- (2) 震旦溜洲女、依薬師仏助得平産語(六二三)
薬師如来救産苦感応(上二七)

右の例の、〃〃線をほどこした部分がそれにあたる。第二は、逆に詳しくする部分を、今昔物語集が削除しているばあいであり、つぎのような例があげられる。

- (3) 震旦溜洲司馬、造薬師仏得活語(六二一)
温州司馬家室親屬一日之中造薬師像七軀感応(上二八)

- (4) 唐高宗代、書生書写大般若経語(七二二)
唐乾封書生依高宗勅書大般若経一秩感応(中四三)

第三は、三宝感応要略録で△無量寿像▽となつてゐるものを、△弥陀像▽とするといったやうなぐあいに、意味内容を同じうする、別の表現におきかえたばあいである。さきに例示した巻六第一五話において、三宝感応要略録で△見浄土▽となつてゐるものが、△生極

楽▽とおきかえられていたのは、この型に属する。

しかし、こうした改変も、けつして、恣意的になされてはいない。改変には、それぞれ、しかるべき相当の理由があつたやうである。

思うに、その理由とは、第一に、三宝感応要略録を範として採用することにした、△だれ▽が△どうした▽というかたたちの標題で、全体を統一しようという要請にもとづくものである。

すなわち、△金剛界曼陀羅が伝え弘められたはなし▽や△薬師如来が難産の苦しみを救つたはなし▽では、他の標題といちじしく均衡を欠いていて、はなはだ具合がわるい。そこで、(1)、(2)のばあいは、△だれ▽に相当する人物がもつてこられたのであろうし、(4)のばあいは逆に、時代や分量がこまかに示されてゐて不都合なので、これを削除したものであろう、と考えられるのである。時代を示すについては、△秦始皇時▽、△後漢明帝時▽、あるいは△唐代▽といったやうに、おおづかみな示し方をするのがふつうであつて、本文中には日付まで記してあつても、標題に年号を出した例はほかにない。分量についても同様で、巻七第四話には△震旦僧智、諸誦大般若経三百卷語▽と分量が示してあるが、それは、二百という量に意味があるからにほかならないであらう。三宝感応要略録巻中第四三話の標題は、△だれ▽が△どうした▽というかたちになつており、その意味では、いちおう改変の必要がないやうにもみえるが、要するに、難産物を排除することによつて、他との均衡を破らずにすむこととあわせて、△だれ▽が△どうした▽という標題の基本の、純度をたもつことができるという、今昔物語集の側からすれば、

ばいずれも軽視することのできない、ふたつの効果が期待されていくわけである。

標題の形式を守りおおうとする編者たちの姿勢は、予想以上に強い。それは、ときに、本文の内容を正確に伝えていなかったり、内容とかけはなれたりした標題をさえつける結果となってあらわれている。右の(8)のばあいは、そのひとつの例といえよう。

今昔物語集の編者たちは、直接的には、右にいうような意味で、線部を削除したものと思われるのであるが、△七驅△はよいとして、△家室親屬一日之中△は、本来、削除してはならないはずの部分なのである。すなわち、このはなしは、△溜洲の司馬が死んだので、親屬や従者たちが集って、一日のうちに七体の薬師像を造って供養したところ、司馬は、その功德で生き返った△というものであり、したがって、△だれ△に相当する部分は、三宝感応要略録でいえば、△温州司馬家室親屬△でなければならぬ。彼らが△一日之中造薬師像七驅△の結果として、司馬は蘇生したのである。にもかかわらず、今昔物語集では、薬師像を造った者についてふれられていないため、あたかも、司馬自らが、生前、薬師像を造ったことがあって、その功德で生き返ることができたはなしであるかのような印象をあたえる標題になってしまっている。

例の二。

震旦呷洲張元寿、造弥陀像生極樂語(六八)

并洲張元寿為亡親造阿弥陀像感応(上14)

今昔物語集の標題が示しているところは、△張元寿△が、△弥陀像を造って極樂に生まれた△はなしだということである。弥陀像を

今昔物語集震旦部の標題について

造ったのも、その結果として極樂往生したのも、ともに張元寿なのであって、彼以外の人物がかかわりをもっと解する余地は、まったくないといってよからう。しかし、本文中には、張元寿が極樂往生したとの記述はない。極樂に生まれることができたのは、張元寿の、さきに亡くなっていた父母だということになっているのである。

こうした、標題と本文との齟齬も、もとはといえ、△父母の後世を救わんがために、張元寿が阿弥陀像を造ったことにより、叫喚地獄におちていた父母は、極樂に生まれかわることができた△というはなしであるにもかかわらず、編者たちが、標題の体裁を守るところを重視するあまりに、三宝感応要略録の△為亡親△を削除してしまったからだといつてよいであろう。

ともあれ、こうした状況からすると、今昔物語集の整えられた標題は、標題としての意味を、ある程度犠牲にしたうえになりたっている、ということになりそうである。そして、これが不注意によるものでないとすれば、今昔物語集にとって、標題の形式を整えることは、多少の犠牲をはらってでもやりとおさなければならぬほど、それほど重要な意味をもっていた、ということになるであろう。

ところで、三宝感応要略録の標題を今昔物語集が改変しているものなかには、つぎのようなばあいもある。

たとえば、巻第六三七話は、その出典である三宝感応要略録巻中第一六話の標題が、

并洲比丘道如唯聞方等名字生淨土感応

となっているのに対して、本文はほとんどそのままのかたちで採用

していながら、標題は、

震旦并洲道如、書写方等生淨土語

としている。淨土に生まれたのを、三宝感応要略録が、方等經を八唯聞Vいたためであるとしているのに対して、今昔物語集は、八書写Vしたからだとしているのである。この改変が、AだれVがAどうしたVというかたちにあてはめるためになされたものでないことは、いうまでもない。

卷六第三七話は、A大乘方等十二部の名字を聞いていたために、十二年後、淨土に生まれることができるであろうと、觀立と勢至とに告げられて蘇生した道如が、以後十二年間、方等大集經の書写に没頭した。二度めの臨終のとき、空に音楽が流れ、天から花が降ったVというはなしである。A唯聞VもA書写Vも、いちおう、はなしをふまえたものではある。しかし、はじめの死のとき、冥界ですでに、十二年後に淨土に生まれかわることのできる事が約束されているのであるから、淨土に生まれかわることのできた理由としては、三宝感応要略録のいうA唯聞Vの方が正しい。にもかかわらず、今昔物語集があえてA書写Vしたのは、おそらく、次話との関連を考慮してのことだと思われる。次話の標題は、つぎのとおりである。

震旦会稽山陰縣書生、書写維摩經生淨土語

維摩經と方等經との違いはあるが、ともに、寫經の功德によつて淨土に生まれたという点で、両話は、類を同じうしている。

なお、標題の改変は、第三七話だけがしているのではない。第三八話もまた、出典たる三宝感応要略録卷中第二〇話の標題、

会稽山陰縣書生寫維摩經除疾救亡觀感応 註2

の——線部を、A生淨土Vと改変しているのである。本話のばあいA維摩經を書写したために、黒暗地獄におちている父と、餓鬼道におちている母との苦を救うことができた一方、書生自らも、後、金粟仏土に生まれることができたVというはなしであり、三宝感応要略録の標題も、今昔物語集の標題も、不都合はない。両者の標題の違いは、どの部分に重きをおいてとらえたかの、立場の違いによるものである。そして今昔物語集が、三宝感応要略録の標題を拒否して、右のような自前の標題を設定したのは、おそらく、前話との関連を考慮してのことと思われる。

こうした、前話、あるいは次話との内容上の関連から、三宝感応要略録の標題が改変されているとみられるものは、もちろん、ほかにも指摘できる。

要するに、今昔物語集が、出典たる三宝感応要略録の標題を改めるについては、AだれVがAどうしたVという形式を守るためと、前話、あるいは次話との関連から、内容あるいは形式を調整するためとの、ふたつの、主だった理由があったように思われるのである。そして、その目的を達成するためには、かなりの無理をさえあえておしとおすという姿勢を、編者ももっていたように思われる。

5

三宝感応要略録からは離れるが、今昔物語集の標題で、はなしとのあいだに食い違いのあるものなかには、たとえば卷十第一七話

のように、単純な不注意によるとみられるものもある。卷十第一七話は、△虎に母を書された李広が、復しゅうのために野に行き、伏している虎を見つけて矢を放ったところ、矢は、みごとに命中した。しかし、矢の立っているのは、虎ではなく、虎に似た岩であった△というはなしである。母を思う一念が、岩を通したということとで讚美されているはなしなのである。ところが標題は、△李広箭、射立似母巖語△となっている。△母を書した虎に似た巖△とあったものの、一部が脱落したものでないかぎり、△虎△を△母△にかえなければならぬ理由はまったくみとめられないから、これは、不注意によるものとみるほかないであろう。

また、一話を構成するに際して、複数の資料をあわせ参照したために差異が生じたのではないかとみられるものもある。

たとえば、卷十第二七話のばあい、標題は△震旦三人兄弟、売家見荆枯、返直返住語△となっているのであるが、本文では、家を売って別々に住もうとした三人の兄弟が、計画を中止して家の代金を返し、もどおり三人で住むことにしたきつかけを、家の前にあった荆が、急に姿を消したからだとしている。今昔物語集の表現をもつてすれば、△其ノ夜、忽ニ其ノ荆失ヌ。明旦ニ見ルニ、荆无シ△ということになる。この△失ヌ△は、続く△此ノ荆、人不取ズシテ既ニ失ニタリ△との記述によって、標題に示されているように、枯れたことを意味するものでないことはあきらかである。

つまり、本文からは、標題の△枯△はとうていでてこないのである。もちろん、△失ヌ△を△枯△に改めなければならぬ理由は、標題の形式のうえからも、前後との関連のうえからも、見いだすこ

今昔物語集震旦部の標題について

とができない。とするならば、いったい、△枯△はどこからもってこられたのか。

この疑問に、解答のいとぐちをあたえるものとして浮びあがってくるのが、続齊諧記、注好選集、二十四孝などに求められる類話である。これらの類話は、語りくちをそれぞれ異にしているものの、荆については、いずれも△枯△としている。ことに続齊諧記は、△其樹即枯、状如火然△と、枯れた木の状態にまでふれている。ちなみに、続齊諧記は、今昔物語集以前の成立にかかるといえる。注好選集は、今昔物語集以後に成立したものはあるが、今昔物語集以前にあった資料を、かなり忠実にふまえているものとみられる。二十四孝も、おそらく、注好選集のばあいと似た状況下にあるものと思われる。

したがって、このことからすると、今昔物語集は、恣意的に標題に△枯△をあてたのではなく、右三書と同じように△枯△となっている資料によりながら、なんらかの事情で、本文中のその部分を△失ヌ△と改変したのだが、標題には、はからずも、もとのままの残りが残されたままになっていた、というばあいで、本文にみる私たちの資料によつたものの、あわせ参照した資料にあった△枯△が標題に出てしまった、というばあいの、ふたつのばあいが、いちおう考えられよう。しかし、前者についていえば、△失ヌ△を△枯△に改めなければならないと考えられる格別の事情はないように思われる。したがって、けつきよくのところ、標題と本文とのあいだに生じた食い違いについては、後者のばあいである可能性が強い、ということになるであろう。

震旦部には、私見によれば、標題にもんだいがあるものが三三例あるのだが、以上にあげた二例のようなばあいは、いずれも、不用意さがもたらしたものであり、数も少なく、むしろ例外的だといつてよい。それに対して、他の大部分は、さきにとりあげた巻六第三七話のように、前後との関連に重きがおかれるあまりに、標題としての本来の意味が、やむなく犠牲にされたものだといつてよいように思われる。形式を統一する目的で、三宝感應要略録の標題を改変した例としてさきにあげた巻六第一八話や、同巻第二一話のばあいも、その調整される形式の細目は、直接的には、前後との関連において決定されている。しかも、それは、三宝感應要略録とかかわりのあるはなしについてだけみられる現象ではなく、ひろく、震旦部一般にみられる現象なのである。

たとえば、冥報記に材をえているとみられる巻九第三四話には、
△震旦刑部侍郎宗行質、行冥途語▽との標題がつけられているのだが、じっさいには、王驢を主人公とするはなしであり、宗行質は、蘇生することを許された王驢が、冥界から帰ろうとしているとき呼びとめて、生き返ったら我が家に行つて、わたしの苦を救うために善根をほどこすよう伝えてほしいと語りかけるにすぎない、あくまでもそえ物的な人物でしかない。宗行質は冥途に行つてはいるが、本話は、しよせん、彼が冥途へ行つたはなしではなく、したがつてもともと、標題にかかげられるに相当しない人物なのである。しかし、にもかかわらず宗行質が標題にとりあげられているのは、仏法を信じない官僚が、冥界で苦しむはなしであるという点で一類をなす前話の標題が、△震旦大史令、傳奕、行冥途語▽であることをお

いて、ほかに理由は考えられない。

ちなみに、第三一話は△震旦柳智感、至冥途帰來語▽、続く第三二話は△侍御史、遜迦躰、依冥途使錯從途歸語▽であり、ともに、冥途から帰つたはなしである。それにさきだつ第二九話、第三〇話も、蘇生譚である。第三四話もまた、本来的には、王驢を主人公とする蘇生譚である。したがつて、第三三話が、冥界で苦しみを受けたはなしでなければ、こうした状況からして、とうぜん、蘇生譚としてあつかわれたであらうと思われるのである。

はなしの内容とかけ離れた、あるいは、少なくとも密着していない標題の付されているものを見ていくと、その大部分が、なんらかのかたちで、前後のはなしと関連をもっているとなると、これはもはや、無意識的なものではなく、一定の方針にもとづいた、しくまされた改変だといわなければならぬ。

さて、いささか短絡的ではあるが、ここでいちおうの結論をいうとすれば、標題に、ときには無理をしいることもあつた方針とは、集を、いわゆる二話一類様式による説話配列で構成しようとする発想にもとづくものではなかつたかと考えられる。

もとより、これは、あくまでもいちおうの見通しなのであって、最終的な結論は、全巻の検討をまたなければならぬことは、いうまでもない。

註 1・2 巻頭に付されている目録の記載による。